

「農に精神性があればこそ(抄)」

宇根 豊 (百姓・思想家)

この文章は、本題は『小農学』とはこういうものなんだ』であり、アカデミズム風には「小農学概論序説」となるが、原稿用紙190枚にもなる。さすがに事務局を経費面で当惑させているので、今回は序章の一部と、最も力を込めて書いた第7章の大半を掲載してもらうことにした。タイトルも第7章の内容に合わせて変えた。折角だから一応全体の目次は載せておきたい(いずれ発表の機会もあるだろう。ないか……)。

「小農学」とはこういうものなんだ

〈もくじ〉 序 章 誰のための学か

- 第1章 小農の世界
- 第2章 時代を問う
- 第3章 百姓はどう見られていたか
- 第4章 百姓仕事の世界
- 第5章 国家を問う
- 第6章 くらしとしての小農
- 第7章 農の精神性
- 第8章 運動としての小農
- 第9章 小農の表現
- 終 章 小農学の未来
- 付 録 小農学会の唄

序章 誰のための学か

(1) 小農のための学か、小農のことを研究する学か

小農のことを研究する学であってもいいだろう。それが小農にとって使える学になっていけば、と思

う。たしかにこれまでも、農学者自身の思いは、百姓のための学を目指していたと思われる。しかし、結果的に百姓を指導したり、誘導したり、目覚めさせる学に落とし込まれていったことを忘れてはならない。

日本農学は、設立当初から「官学」であった。このことは明白である。決して百姓のための学ではなかったのである。次の項で説明するが、決して「野の学」や「百姓学」ではなかった。私に農学を転換させる力は、ありもしないが、「野の学」や「百姓学」を構想することはできる。この「小農学概論」は、その試みである。

しかし、なぜ「学」なんだ、という疑問に答えなければならぬ。「学なんていらぬ、情報があればいい」というのは、現代のおおかたの百姓の実感だろう。「指導員よりも、先進農家の知見の方がよほど役に立つ」というのも、うなずける。しかし、それではその情報や知見とやらを裏付けている思想・価値観・学をまな板にのせる方法を手にすることはできない。時代の流れに流されてしまうだろう。たまには自分を突き放して見ることも必要だ。

その方法を教えてくれるのが思想や学なんだ。それは決して大学で学ぶものではなく、日々の営みの中でも習練して身につけていくものだ。しかし、百姓の場合、それを誰も学とはみなさない。山下惣一の膨大な表現を見るといい。多くの人が山下の表現に惹かれてきたが、それを「学」や「思想」として正当に扱い、位置づけてきただろうか。たぶん「思想」としては、認める人もあるが、「学」として認める人は皆無だろう。私は断定する。山下惣一の表現は立派な「百姓学」「野の学問」なんだ。なぜそう思わないか、そこが問題だが、それは「学」も「思想」も村の外で生まれるものだと思われてきたからだ、ひとまず言っておこう。

(2) これまでの学では見えない世界がある

そこで、日本での「野の学問」の先達である「民俗学」のことを思ってみる。じつは創設者である柳田國男は民俗学がアカデミズムに取り込まれることを、相当嫌っていて、抵抗していた(『新しい野の学問』の時代へ)菅豊。その理由は明らかだ。私の言葉に言い換えると、庶民の内からのまなざしが、既成の学のまなざしで整理・表現されると、いつのまにか変質して本質が見えなくなることを恐れたのだ。

小農学は新しい「野の学問」であってほしいというのは、私の主張でしかないが、少なくとも既成の学をモデルにすることだけはやめてほしい。ために既存の学会誌を、どこの学会でもいいから開いて「論文」とやらに目を通してみたい。まずその形式からして異形・異常で、文体には生の息吹が

感じられない。

その理由は、これまでの学が、徹頭徹尾「外からのまなざし」に依存しているからだ。ただ、そのことを批判するためには、内からのまなざしだけでは不可能で、外からのまなざしも必要なのだ。ここが悩ましい。たとえば、「農は資本主義に合わない」という表現は、内からのまなざしだけでは生まれえない。内からのまなざしで、現代社会への違和感の根源を徹底的に突きつめていって、ぼんやりとその正体が経済至上の価値観、つまり、資本主義ではないかと思いがついたときに、「資本主義とは何か」は、内からのまなざしではつかめないことを知ることになる。

そこで、既存の学の蓄積にたよらざるをえなくなる。「そうだろう、だからやっぱり経済学が現代社会では必要不可欠なんだ」という結論に持つて行かれても困るんだ。あくまでも百姓の日々の営みで感じる内からのまなざしによる違和感と、経済学の外からのまなざしが交わるところで、生まれる表現がこれまではなかったことが問題なんだ。

そうでなかったら、昭和初期に農本主義者の一部が指摘した「農は資本主義に合わない」という大発見がなぜ、その後85年間もほったらかしにされ、農業経済学者の誰もがそういう発言をしなかったのかがわからないだろう。じつは、この発見も内からのまなざしと外からのまなざしがつながったところで生まれている。

最初から言い方が難しくなった。もっと身近な表現の方に移ろう。

「田畑を耕すときに、楽しく耕そうと、悲痛な思いで耕そうと、同じ時間がかかったなら、同じ生産

性だといえるだろうか」。あるいは「同じものをつくるなら、短い労働時間で低コストの方が優れているだろうか」。はたまた「反収が多い他人の田畑の方が、条件の悪い自家の田畑よりもいいと言えるだろうか」。こう考えるのが内からのまなざしの「学」である。同じ時間、同じ面積の田畑を耕しているも、一人一人の情愛・思い、観察眼・感覚、経験はこととなる。それをこれまでの学問のように無視し続けていっていいのだろうか、と問う学が必要ではないか。

外からのまなざしは時代の価値観に引きずられる。これまでの経済価値重視の農業生産の学では、もういけない。なぜいけないのか、それを考えるのも学なんだ。

(3) 野の学問の時代へ(略)

(4) 新しい学・思想の方法論

「小農学」は百姓のためだけの学ではない。もちろん、小規模な農家のための学ではない。「小農」に含まれるすべての生きもの(有情)の声を汲み上げ、表現したものになる。簡単に「汲み上げる」「表現する」と言ってしまったが、ここに学のコアがあるのだ。つまり、「吸い上げる」「汲み取る」方法(A)と、「表現する」「思想化する」方法(B)が、新しくないならば、既成の学と同じ落とし穴にはまるだろう。

そこで、仮に(A)を「とらえ方」と呼び、(B)を「伝え方」と呼ぼう。どちらも大切で、どちらも新しい方法を生みださなければならぬ。もちろん、

参考になるのがこれまでの「野の学問」である、「民俗学」「地元学」「百姓学」などである。

私が提唱している「百姓学」は農学者からは、ごく一部を除いて黙殺されたが、民俗学者の菅豊だけが、まともに『新しい野の学問の時代へ』(岩波書店2014年)で、『百姓学宣言』をとりあげて、近代の学を振り返っている。その部分を引用してみる。

「近代において、官学アカデミズムは国家の権威と権力に支えられ、またその権威と権力を支える学問として協働的、共犯的に存在してきた。それは地域の人間から生まれた経験を重視する在来の知を排除し、蔑視する価値を醸成してきた。

こうした官学アカデミズムが席卷するなかで、在来の知の復権を目指した異端の学として民俗学などの「野の学問」が生まれた。しかし民俗学はアカデミズム化の過程で「普通の学」を目指し、その独特な「野の学問」としての異色性を捨て去ってしまったのである。

ところが近年になって、かつての「野の学問」とは異なる知と実践の様式として「新しい野の学問」が立ち上がっている。(ここで『百姓学宣言』330ページから19行引用した後で)自らの存在を客体視しながら、自らの立ち位置で、自らのために、既存の学術世界にはない、あるいは看過され軽視されるような新しい知識を形作ろうという動きは、制度化した学問の外側で行われているのである。そしてそのような動きは、かつて「野の学問」が生まれ落ちた近代的状況のみにおいて限定的に惹き起されるのではなく、いまという現代的状況でも沸き起

こり続けている知識生産と社会実践の動きであるといえよう。」

小農の世界を表現するのに、既存の学を活用するのか、それとも「新しい野の学」で試みるのか、それともそういうことには無頓着でいいとするのか、案外重要な視点なのだ。小農の世界を既存の学が表現できなかったのは、既存の学に内からのまなざしの「とらえ方」と「伝え方」がなかったからだ。

(5) 内からのまなざし

学者は当然ながら、農業「専門家」はことごとく、外からのまなざしを優先させる。問題はその外からのまなざしでは、何かが見えないということ、自覚できなくなってしまうということにある。これが既存の学のすざさであり、大きな暗闇だ。

①「小農の神髄＝農の本質」を語るということは、外からのまなざしに凝り固まった人間には発想できないだろう。なぜなら、既存の学は、それを個人的なものだと決めつけるだろう。普遍的なものを目指してしまうのが既存の学の最大の特徴（＝欠陥）なのだからしかたがない。つまり、「小農の真髄」を語るときに、みんなに理解してもらおうなどと考えないことだ。自分自身の体験や情愛や感情を内からのまなざしで語ればいいのだ。

②私たちが言う「小農」とは、反近代（脱近代）の思想の代名詞だろう。近代化によって軽視され、看過されてきた世界こそが、農の中の小農の世界だからだ。山下惣一が言う「小農は規模の表現ではない」というのは、そのことを言っている。近代を

問うことは、近代的な価値観が農とはどうしても合わない理由があるからだ。それは資本主義（社会主義にしても近代化思想という意味では同類だ）の性格に起因するからだ。

③したがって、時代の価値によって追放された世界を、意識的に内側から眺めると（つまり、「とらえ方」を身につけると、「小農の世界」はよく見えてくる。その典型は「カネにならない世界」の一切だ。「小農」は「カネにならない世界」を馬鹿にしない。「小農」の世界こそが、農の土台だからだ。

④ただ内からのまなざしは外に向かって表現する必要を感じない。自分の中に抱きしめておればいいものだ。それを外に向かって（「伝え方」を身につけて）表現することが新しいのだ。なぜなら、それが菅豊が言うように「新しい野の学問」になるからだ。

(6) 外からのまなざしも大切だ(略)

(7) 外からのまなざしと内からのまなざしが交わるころ(略)

〈第1章〜第6章〉(略)

第7章 農の精神性

「小農」とは、「農の本質」を懐に入れて生きる生き方である、と私は感じる。そこで、「農の本質」を明らかにしなければならなくなるが、これが難しい。なぜなら、「農の本質」は、現象の中に現れてくるのではなく、まして「食料」や「天地自然」という

ものの中にあるのでもなく、一人一人の精神の中にあるからだ。

不思議なことに農の「精神性」についての論考は、これまでほとんどない。私は、これまで誰もやらなかったことをここで試みる。

この章は私が最も力を込めて書いたので、相当長い。そこで9節に分けた。また事情があつて、文体がここだけは生真面目で「ですます調」になっているが、お許しを。

- 1 節 一服するひとときの意味
- 2 節 神の死が迫っている
- 3 節 生きものの死を見つめる
- 4 節 百姓仕事の精神性
- 5 節 百姓の天地観
- 6 節 なぜ「天地自然」に惹かれるのか
- 7 節 農の本質を求める
- 8 節 無意識に支えられている天地自然
- 9 節 農と宗教の関係

1 節：一服するひとときの意味

(1) 天地有情の実感に包まれる

百姓仕事の合間の一服するひとときは、休憩時間であり、疲れを癒やす時間だというのがこれまでの理解でした。たしかに賃労働では休憩時間は、労働を続けるために必要な休息・準備時間かもしれませんが、百姓仕事の場合は、まったく別の意味を持っています。

仕事の最中には見えないものを、見るときなので

す。百姓仕事とは相手である作物や田畑との関係への熱中、あるいは天地自然への没入ですから、そこから醒めたときに、真つ先に目にするのは風景です。それは眺めると言うよりも、風景の方から飛び込んでくるのです。なぜなら、それまで、そういう風景に囲まれて(包まれて)仕事をしていたからです。

その時の風景とは、見慣れたあたりまえの風景だからいいのです。そこに変化があると、心がざわめきます。すると心が安まりません。もちろん、変化がないと言つても、四季折々の変化は毎年変わらずに訪れていますから、そうした変化は無意識に感じています。

しかし、その場合でも三層の感覚が働きます。まず、畦で一服しながら、あらためて田んぼ全体の稲の葉の輝きに目をとめ「うん、今年もまたよく育っているな」と感じ、オタマジヤクシに足が生えてきたのを見て「今年もまたそろそろ水を落とすとしてもいいな」と考えます。これは、たしかに仕事の出来栄えを判断し、あるいは次の仕事の予定を考えているのですから、仕事と無縁ではなく、その延長にあると言えるでしょう。

次に、稲の葉先から一斉にあふれてくる露の輝きに「きれいだ」と感嘆し、オタマジヤクシの群れを見て「今年もまたいっばい生まれたな」と安堵するのは、直接仕事と関係はありません。だから、ただの休憩時間の中で見るともなく見ている風物にすぎない、と思うなら、それも違います。

このことを説明するのはけつこう骨が折れます。現在では「自然」という名詞が普通に使われているので、つい私たちは見ている対象と人間である自分

を分けてしまいます。人間が見ている稲であり、人間が見ているオタマジヤクシなのです。しかし、同時に人間である自分もまた稲や蛙と同じ生きもの同士で、同じ天地世界に生きているという感覚もあります。それはかつての日本人が人間と自然を分ける「自然」という名詞を持たずに、人間も「天地」に含まれ、「天地」の一員だと感じていた頃の名残でもあるのです。現在でも「人間も自然の一員である」という言い方に賛成する人が多数を占めることがその証拠です(語義に忠実に従うなら、自然とは神と人間・人造物以外のものを指すのですから、人間が自然の一員であるはずはありません)。

しかし、私たちはこの場合の「自然」を人間も含む「天地」の意味で無意識に使用しているのです。百姓仕事とは、人間以外の「自然」の中で、人間と自然が分かれて働いているのではなく、人間も含む「天地」の中で一緒に働いているのです。この感覚をわかつてもらえるでしょうか。

つまり、現代でも天地の一員として仕事をしている百姓は、一服するときに、ことのほか生きものの姿に目をとめます。あるいは生ききもので満ちている風景を眺めます。

そして、じつは百姓は必ずしも自覚していないのですが、そこに天地有情のメッセージを読み取っているのです。稲の葉露のきらめき、オタマジヤクシの泳ぐ波紋に、天地有情が今年も繰り返し、そこにあるということを確認しているのです。これが三層めです。

まるで百年一日の如く、変わらない生きものたちがそこにいて、生をくり返している風景こそが、あたりまえの何の変哲もない世界、つまり、天地有情

の共同体の姿なのです。この世界の中に包まれてあるという感覚が、一服するときに訪れます。仕事の最中にはなかなか感じないものです。天地有情との一体感の感覚が、百姓の身と心を安堵させ、安らぎを与えてくれるのです。身も心も休まるのです。ただこの感覚は、無意識に受けとめているだけのことが多いのです。しかも、大切なことは、こうしたひとときによって「天地自然観」が無意識に身体に蓄積していくのです(無意識については、8節で本格的に論じます)。

(2) 二宮尊徳の見方(略)

2節：神の死が迫っている

(1) 天地が神になったわけ

「百姓なら豊作を祈願するでしょう」と言われます。また、「農業にとつて、祭りは大切な行事でしょう」とも言われます。ようするに、こうした精神世界は農にとつて欠かせないという感覚が、百姓でなくても日本人には残っているのです。それは人間が米や野菜や果物を「製造」しているのではなく、天地のめぐみであることが、それとなく了解されているからでしょう。

自分の力ではないもののおかげで、みのりがもたらされるのですから、「お礼・感謝」と同時にそれが安定して繰り返されることを願う「祈り・祈願」が、百姓の精神生活の中では重要ではないかと、百姓以外の人も気づいていることは重要です。

そこで、この「感謝」と「祈願」の精神を見つめま

す。私が先ほどの人に「誰に、何に祈願するので
か」と質問すると、「そんなことは決まっているで
しょう、神様でしょう」と断言されます。たしかに
村の「祭り」は、集団的な「感謝」と「祈願」の表現
活動ですし、その場所はほとんどが村の神社で行わ
れます。いわば神の前で、神に対して行われます
から、感謝と祈願は神に向けられているように思え
ます。

しかし、私の村の神社は「春日神社」という名称
ですから、奈良の春日大社から江戸時代に勧請して
建てられたようです。ところが、私も含めて村の
人たちは、どういう神様（祭神）が祀（まつ）られて
いるかをほとんど知りません。その証拠に上の部
落の神社は七郎神社、下の部落の神社は志自岐（し
じき）神社ですが、氏子の気質には祀られている神
の影響は見られません。

さて祈願祭には、隣の村の白山神社の神主に来て
もらって祝詞をあげてもらいます。その祝詞には
たしかに天照大神への祈願の言葉が出てきます。
それは神社本庁のひな形を忠実に読み上げても
らっているからです。しかし、この天照大神なら、
太陽神ですから、百姓の感謝と祈願の相手として、
ぴったりです。伊勢神宮が百姓に人気があるのは
当然のことです、天照大神が皇室の祖先神だとい
うのは、よくできた話だと感心します。ただ明治以降、
国家によって村々の神社が統制され、系列化されて
いったのは、いいことではなかったと思います。
それまでは、国家や伊勢神宮や天皇家とはほとんど
関係なく、村の鎮守の神であったことの意味が薄れ
ていったからです。

ここで立ち止まって考えたいことがあります。

百姓の「感謝」と「祈願」は、天照大神信仰や神社の
創建よりもはるか前からあった、ということだ
す。しかも、この「感謝」と「祈願」は、精神として別
のものだ、ということだ。

現在の百姓でも作物を収穫するときには、天地自
然に感謝します。それはお天道さまだけでなく、
水や土や風や生きものや家族や村の人たちに向け
られます。さらに忘れてならないのは、この田畑
を拓いてくれた先祖・先人にも向けられます。こ
れらの背後の神々は、どこにおられるのでしょ
うか。ちゃんと村の中にいます。ただそれを「天地
のめぐみ」と言うか、「神のおかげ」と言うかは、か
なり隔たりがあります。天地は目に見えませんが、
神は目に見えないからです。

天地ではなく、神という抽象的な概念を創造す
るのは、もちろん、宗教的でないものがないので、こ
の辺の事情がよくわかりません。そこで、私見を
これから述べることにします。なぜなら、天地に
対する百姓の素朴な感謝の感情から、神への祈願
という行為の間には断絶があるような気がするか
らです。

（2）祈願と感謝は別物

天地（神）に豊作を「祈願する」というのは、ほん
とくに昔から行われていたのでしょうか。豊作を
「感謝する」気持ちには当然あったでしょう。なぜな
ら、田畑の稔りは天地のめぐみだというのは、人為
よりも天地の力でもたらされるからです。それが
豊作であればなおさらのことですが、よしんば不作

であつても、もたらされたものはありがたくいただ
くしかないものです。そこに災いをも引き受けざ
るをえない人間の自覚があります。

しかし、まだ植え付ける前に豊作を「祈願する」
のは、天地（神）の領域に口出しすることではない
でしょうか。「神様どうか豊作にしてください」「そ
れは、私が決めることだ」「そう言わずに、豊作を約
束してください」「なぜ、人間の気持ちに合わせな
くてはならないのだ」「そこを何とか」「うるさいや
つだ」ということにもなりかねません。

もちろん、百姓なら豊作であつてほしいとは思
いますが、それは思うだけのことです。豊作かどう
かは人為の及ばぬ天地の采配であつて、人間が口出
しすることではありません。このことを江戸前期
に伊勢神宮外宮の神官であつた度会延佳（わたらい
のぶよし）はしっかり指摘しています。彼の話を
聞いた坂十仏の著した『太神宮参詣記』（伊勢神宮
参詣の巡礼紀行文）から引用してみます。

「当宮参宮の深き習は、念珠ねんじゆをも取らず、幣帛へいはくをも
捧げずして、心に祈るところ無きを内清浄うちけいじやうと云ふ。
潮をかき水をあびて、身に汚れたるところ無きを外
清浄ぐわいけいじやうと言えり、内清浄になりぬれば、神の心と我が
心と隔てなし。既に明神に同じ。しからば何を望
みてか、祈請の心あるべきや。これ真実の参宮な
り（太神宮の神職より）承りしほどに、渴仰の涙止
め難し」

つまり、「祈願」ということがない状態こそが、神
に向き合う心だと言うのです。神と一体になれる
のです。そこで感じるのは「ありがたい」という感

謝だけでしよう。それなのに、神への「祈願」が始まったことが、神と人間を隔てることになります。

現代の神社詣では、祈願して、合格や安全や繁盛の約束(御利益)を取り付けるために行われているのが常態ですから、私がこんなことを言っても通用しないでしょうが、少なくともかつての百姓の神に対する姿勢はこうではなかったということを確認しておきたいのです。

そこで、これまでも簡単に、天地⇨神と言ってきたましたが、これは妥当なことでしょうか。

百姓にとつて「天地」とは、村を取り巻く森羅万象の一切ですが、とりわけ田畑とそこに降り注ぐ日の光、空気と風や雨、山や川や池からの水、そして、何よりも田畑と土、そして、草や虫や動物などの生きものたち、そして、村人を含む時を超えた天地有情の共同体のことです。それを、「神」と呼ぶには、どういう飛躍があったのでしょうか。

宗教学者は、日本の神は自然への畏怖や恐怖から生まれたと、つまり、それが自然に対する崇拜に變化したときに神が生まれたと説明しています。しかし、自然への恐怖や畏怖なら誰でも感じますし、それに人知を越えた超越的なものを感じ、頭を垂れることは誰でもあるでしょう。でもそれに「神」と名づける必要があったのでしょうか。

私はたぶん「祀(まつ)る」ときに、名前が必要になったのだと思います。祀る対象であるご神体が眼の前にあるときは、祀りも簡単ですが、ないときは困ります。雨の日のお日様や、干魘の時の雨や、春を運んでくれる風を、眼前に留めるわけにはいきません。まして天地全体を祀ろうとすると、何か名称が必要になります。

祀るのは一人で祀ることはありません。その相手が、村のみんなに共感・共有されるときに、祀り⇨祭りは成立するのです。天地はなぜ有情(生きもの)で満たされているのでしょうか。その有情にしても、なぜ毎年毎年、生を繰り返して続けているのでしょうか。そうした人知でつかめないもの、すこさ、奥深さに名前を与えたくなる気持ち、村人の共感を呼んだときに、祀り⇨祭りが始まったのでしょうか。

それは天地が宗教化されたと言うべきです。そして、現代の私たちですら、具体的な「天地」のもろもろよりも、「神」の方がありがたいと感じるようになってきているのです。

(3) 神の死が近づくと

ところが、そうやってはるか昔に生まれた神に、大きな危機が迫っているのです。昭和四十年代までは、多くの百姓は農作物の収穫を表現するときに「つくった」とは言いませんでした。ほとんどの百姓が「できた」「とれた」「なった」と表現したものです。それが「つくった」「つくる」と変化してきました。なぜ変化してきたのかは、簡単に説明するのは難しいのですが、とくに重要な原因を指摘しておきましょう。

「できる・とれる・なる」は、人間が主体ではなく、あくまでも天地自然のめぐみを人間は受け取るという受け身の感覚です。一方の「つくると」は、人間が主体で、自然を加工して目的とするものを生産するという近代(科学的)な発想です。つまり、昭和四十年代にこうした転換が、百姓も意識しない

ちに徐々に進行したということです。農業の本格的な近代化は昭和三十年代に始まりましたが、まだ前近代の天地観も色濃く残っていました。それが、近代化思想によって、こうした感覚が時代遅れの様相を呈するようになるのが、昭和四十年代なのです。

一体、私たちの社会に、何が起きたのでしょうか。私は「高度経済成長」と「科学技術の発達」が主因だと感じます。農村と農業の変化は半端ではありませんでした。

こうして「天地のめぐみ」を受けとる感性は、「農業生産」という農業技術と農業経営に変革されていったのです。私も今になって気づく有様ですが、この事態を「天地⇨神」の死だと考えた人はほとんどいませんでした。そして、神の死は、現在も確実に進行中なのです。

名詞の「自然」は、Natureの翻訳語として新しく明治時代に造語された新造語ですから、神と人間以外を意味しています。ところが、「天地」とは人間も、そして、神も含みます(したがって、「天地」はNatureの翻訳語にならなかつたのです)。天地を自然と呼ぶことによって、人間は天地から分かれて、人間として存在することになります(自然と呼ぶことによって、人間は自然の外に出ることができません)。

それまでの天地中心の「できる・とれる・なる」の世界観が、とうとう人間中心の「つくると」という新しい世界観によって侵食され、覆われていったのが昭和四十年代だったのです。

もちろん、それは「人間も天地の一員である」という世界観の死でもあり、天地に感謝する心(精神)

の死なのです。これを「神の死」だ、と私は感じるのです。こうして「神」は人間の欲望達成のために「祈願」され、その見返りに「感謝」されるという顛倒した立場に追い込まれるようになりました。

天地を神と言い換えようとした先人の宗教化の試みは、大きな試練に直面しているのです。私は神の死は、天地の死と同様に避けられないと思いません。しかし、その一方で「自然」の価値はいよいよ高まるでしょう。いや言い方を間違えました。人間以外を指す「自然」の価値が高まれば高まるほど、天地という世界認識は衰えていくのです。天地と言っているときには、百姓は天地の中で、天地に没入し、天地と一体になることができます。その時に天地に人為を越えたものを感じるのです。それが「神」だと言われれば、そうかもしれないと感じてきたのです。

しかし、「自然」とは、人間が自然の外から眺めるものから、没入したり、一体化するものではありません。そうは言っても、まだまだ多くの百姓たちは「天地」を「自然」と言い換えているだけで、天地に包まれる感覚は失っていないと思っただけでしょう。でも、天地を対象化して科学的に分析していくことは、「つくる」手段を発達させ、一方で「できる」という感覚を、つまり、人間が徹底的に受け身になって、神に近づく気持ちを変えさせてきたことを軽視してはなりません。

「感謝」抜きの「祈願」があたりまえになろうとしています。とくに神に人間の個人的な欲望の達成を祈願するというのは、度会延佳を驚愕させずにはおられないでしょう。はたして天地＝神は、現世利益を求めて手を合わせる人間を相手にしてくれ

ているのでしょうか。

神＝天地とは、そういう欲望達成の相手ではなかったのに、残念ながら「神社」(神道)はそれに歯止めをかけようとするどころか、むしろ歓迎しているような態度をとっていると言っても言いすぎではないでしょう。神道は農の護教であることを放棄してしまうのでしょうか。残念なことです。

それではどうしたらいいのでしょうか。私のアイデアのひとつは、天地の一つ一つの生きものの生に、生を感じなおし、タマシイを感じる習慣をもういちど抱きしめることです。そのためには、百姓仕事に生産性を求めず、生きものにまなざしを向ける時間を堅持すべきです。

3節：生きものの死を見つめる

(1) 百姓ほど生きものを殺す仕事はない(略)

(2) 生きものの死とは

はたして「百姓仕事は生きものを殺す仕事だ」という感じ方・考え方は、西洋的な新しい考え方なのでしょうか。二千四百年前に釈迦は、百姓が耕した畑から出てきた虫を鳥がつかいばむのを見て、生きものが抱えている生と死の苦悶に目覚め、救済の道を求め続け、遂には仏教を開いた、と言われています(『和文仏教聖典』による)。もちろん、これは古い時代に創作された「仏伝」ではあるでしょうが、釈迦は百姓ではなかったから気づいたのかもしれないし、日本人ではなかったからそう感じたのかもしれない。

なぜ釈迦は悩み、当時の百姓も現代の百姓も悩まないのでしょうか。それを「あたりまえ」だと思いい、「仕方がない」と感じているからだと思われます。幸いなことに、驚のために(田畑を耕すために)絶滅していく生きものはいないようです。その証拠に、毎年(二千年以上も)言ってもいいでしょう)生きものはそこにあたりまえに出現してくれます。これは天地が百姓を悩まずに済むようにしてくれていると言っただけでしょう。したがって、生きものが「あたりまえ」にいたことが、殺生を「仕方がない」と容認し、ことさらに自覚しない原因なのかもしれません。

百姓仕事の中でも「草とり」ほど、生きものと濃密に関わる仕事はありません。百姓がもつとも仕事に没頭しやすいものです。その理由は、直接手を下して、体そのもので、草という相手に触れ、しかも、相手の「命を奪う」仕事だからです。それなのに「命を奪う」という認識がないのはどうしてでしょうか。これほどありがたいことはありません。

一言で言うなら、「生」が満ちあふれている世界に入り込んでいくからです。それが「あたりまえ」の真の姿です。ここでは、死は生とつながっています。一体化していると言ってもいいでしょう。死があるから、生が愛おしく感じられるのです。草とりは草を根絶させる仕事ではありません。はつきり言っておきますが、また来年も草とりをするところが約束されている仕事です。

となりの婆ちゃんがいつも言っています。「今年も草が伸びる季節になったね」と。つまり、今年も草とりができる季節がめぐってきたことを喜んで

いるのです。「草とりは、とつてもとつても、また来年になると草が生えてくるやりがいのない作業だ」という近代的な発想とは、対極にあるものです。後者は種子を激減させて、やがては草を根絶に追い込むことに喜びを感じる精神を誕生させました。近代化技術の開発者は、草の死にきわめて鈍感です。死に喜びを感じていると言つてもいいでしょう。

となりの婆ちゃんも、草の死には鈍感ですが、草の生には敏感です。このところはうまく表現できないのですが、婆ちゃんは草とりしながら「草を殺しながら」、「また来年会おうね」と言っているようなものなのです。

近代的な除草剤の開発は、二重の意味で大きな罪を犯しています。一つは、草そのものの再生を破壊していること。もう一つは、人間が草の死に悩まなくてもいい世界観を破壊しようとしていること、です。

田畑の生きものの多くが減少しています。私たちが提案している田んぼの生きもの指標150種(動物)のうち95種(63%)は、どこかの都道府県で絶滅危惧種に指定されています。生きものに向き合う時間すら許さない社会では、本当の意味で農業に代表される近代化技術は、断罪されることはないでしょう。

4節：百姓仕事の精神性

生きものの生死にもっとも影響を与える百姓仕事から、農の精神性の、もうひとつの核心に迫ってみましょう。

(1) 技術と仕事の違い

「百姓仕事にあつて、農業技術にないものは何か」、あるいは「農業技術にあつて、百姓仕事にないものは何か」という問いは、とても重要です。農業技術を研究し、普及し、指導してきた「専門家」(百姓以外の農業関係者を指す)は、こういう問いかけを自らに課することがほとんどありませんでした。なぜなら、農業技術は百姓仕事の発展したもので、あるいは百姓仕事から抽出して技術化したもの、という考えが常識になつてからです。

たとえば、手で植えていた「手植え」という百姓仕事は、田植機による「機械移植」に進歩した、と言われれば、納得してしまふ人が多いでしょう。しかし、田植機による移植技術は、手植えという百姓仕事を参考にはしていますが、まったく別物かもしれないのです。そこで「手植えにあつて、機械移植にないもの」という問いを立ててみましょう。答えは無数にあがってきますが、代表例を示すことにします。

① 田植え歌を歌い、また、聞きながら早乙女が中心になつて植える習慣。早乙女、早苗、早月、さなぶり、五月雨、桜の「サ」は稲の神だという説に、私は賛成します。

② 自分の足で田の土の感触や深さを感じながら、あるいは自分の手で苗の育ちを感じながら、体全体で風や水や日差しを感じながら植える体感性。

③ すでにどこからか飛んできて泳ぎ回っている蛙や源五郎や鉛棒、産卵中の精霊とんぼ(赤とんぼ)や、水面すれすれに飛ぶ燕に目をとめる余裕。

④ 腰を伸ばしてみると、田んぼの水鏡に映っている村の風景に囲まれ、その中で働いている自分が、天地と一体になつていような感じ。

⑤ 余つた苗がかわいそうという気持ち。

そこで、逆の質問、「田植機での移植技術にあつて、手植えにないもの」にも答えておきましょう。

① いかに効率よく植えるかという意識。

② 運転技術、機械の整備技術。

③ 事故をおこさないような注意。

④ あまつた苗がもつたいたないというコスト意識。

⑤ 稲は「できる」のではなく、百姓が「つくる」という意識の誕生。

どうでしょうか。両者のどこに違いがあるかはつきりしたのではないでしょう。決して技術は仕事から抽出したのではなく、また、仕事の発展した形態でもありません。むしろ、技術は仕事を壊してきたのかもしれない。

(2) 仕事の精神性

田んぼの「生きもの調査」をやると、ほとんどの百姓が「まだこんなに生きものがいたのか」と驚きます。百姓仕事が農業技術から侵食されていくにつれて、失われていった生きものへのまなざしが、生きもの調査という新しい百姓仕事によつて復活してくるからです。生きもの調査をした後、「太鼓打ちを30年ぶりに見た」と発言した百姓がいました。彼は私と同年代の百姓でしたから、最後に太

鼓打ちを見たのは30歳前後だったということを覚えてはいたのです。

30年前は生きものへのまなざしが百姓仕事には残っており、その後の農業技術からは失われていた、と考えることもできます。彼は先の発言の後、「オレは30年間、何を見てきたのだろうか」と真顔で私に言いました。

これを単に時代の変化だと片付けてはならないでしょう。百姓の精神がどのように、何によって、どこから変化したかに着目するなら、これは仕事から技術への変化がもたらした影響だと気づきます。しかも、この変化は生きものへのまなざしだけでなくまららないのです。

近代化によって失われていくものへの愛惜が、近代化技術を推進する「専門家」に希薄なのはどうしてでしょうか。好意的に解釈するなら、上部技術の土台には、仕事（土台技術）の世界が失われずに保存されているという思い込みがあるからでしょう。こういう意識が「専門家」にあるうちは、まだいいのです。対策も立てられます。ところが、技術は「進歩・発展」をもたらすためにあるという信念では、そういう世界に目を向ける気持ちすらなくなります。

この農業技術の最大の欠陥を乗り越える道すじを考えるにあたって、まず近代的な農業技術はそのほとんどが「上部技術」であると位置づけます。一応、科学的に証明できるもので、ほぼマニュアル化できるものです。専門家が研究し、普及・指導できる技術です。そこには百姓の経験や情愛などは必要がありません。誰でもが行使できる技術です。

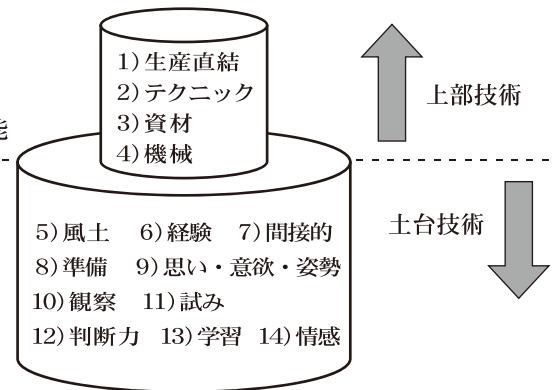


図 1-1 土台技術と上部技術のイメージ

専門家が指導する画一的な農業技術（上部技術）が、一人一人の百姓が個性的であるにもかかわらず、また、田畑の条件が一枚一枚ちがうのに、通用するのはどうしてでしょうか。それは、その上部技術の土台に、百姓の経験や情愛を含んだ百姓仕事があつて、この百姓仕事で上部技術を使いこなしているからです。上部技術を普及していく専門家は、この視点が不可欠です。

上部技術を支えている百姓仕事は、その大半はマニュアル化できない無意識の判断でおこなわれていますが、そのなかでも意識できる部分は「土台技術」として表現することができるようになるのです（『田んぼの忘れもの』1993年）。

(3) 土台技術論の展開

8月になって肩掛けの刈払機で田んぼの畦草刈りをしていくと、沼蛙がよく跳びはねるようになります。私はそのたびに躊躇して、一瞬草刈りの進行を止めます（これは無意識に身体が動くものです）。この躊躇する時間が半日で5分になったとしましょう。この5分間は無駄な時間だろうか、と考えてみてください。

そもそも、この「躊躇する5分間」は、農業技術に含まれていません。なぜなら、農業技術は目的としていないものは生産しないことになっていきますから、目的外の事象・世界は、阻害要因か、もしくは意識の外に放逐されています。ところが、「刈払機による畦草刈り」という農業技術を採用している百姓には、「蛙を切るまい」として躊躇する気持ち「は残っていて、無意識のうちに農業技術の行使を「妨害」しているのです。それは「妨害」しているのではなく、別の「蛙を育てる土台技術」を採用している、とらえたらどうでしょうか。

これは、上部技術が扱えない広大な世界が、「百姓仕事」の中にとり残されていて、採用を待っていると考えこともできます。

そこで、躊躇する行為（仕事あるいは土台技術）の本体は何だろうか、と考えてみましょう。答えは簡単に見つかります。「躊躇しなくなったら、百姓の中の何が失われるか」を考えればいいのです。

① 蛙へのまなざし。これが一番大きいでしょう。躊躇するということは、百姓は蛙を見ているからです。

② 蛙への情愛。見ているだけではありません。

蛙を殺したくないという感覚が生じるということ
は、自分だけの力ではありません。家族や村人た
ちの情愛が歴史的に引き継がれてきているからで
しょう。生きものを相手としてきた農の伝統を、
体現しているのです。

③もともと百姓仕事を効率でとらえないという
感覚。これもとても大切です。農業技術が成立す
る過程で失われた世界とも言えるでしょう(ちな
みに労働生産性を無視する農業技術は1970年
代までは、農業界の主流だったことを思い起した
いものです。その典型は米の「多収穫技術」でした。
百姓はあらん限りの労力と工夫と情熱と、そして、
時間をつぎ込んだのです)。

さて、20数年ぶりに、「土台技術」論を展開するに
あたって、百姓仕事の中の「精神世界」を失われな
いようにする技術としての「土台技術」に着目する
ことにします。

たしかに刈払機による蛙の殺傷は、せいぜい3×
5匹/10aで、蛙の密度が10000匹/10aを越
えるわが家の田んぼでは、生態学的に検討しても、
翌年の密度に影響があるとは思えません。農業技
術(上部技術)の推進者はそう判定するかもしれま
せんが、蛙の死を無視できない心情にこそ、百姓仕
事の「精神性」(精神世界)があるのです。農学(上
部技術論)はこれを扱う方法論を持っていないか
ら、とりあげなかっただけの話なのです。

こうした精神性に根ざしたまなざしがなければ、
果たして「生物多様性」や「環境保全型農業」、「多面
的機能の発揮」や「自然環境の保護」などは、農業
技術の中に位置づけることができるのでしょうか。
無理でしょう。

こうして、私は畦の草刈りを「技術化」されたも
のとして語っています。たしかに刈払機は農機具
として傑作の一つだと思えます。この機械の労働
生産性に及ぼす効果は絶大です。畦に除草剤を散
布する技術が近年になるまで普及しなかったのは、
この草刈り機による草刈り技術が、それまでの鎌に
よる草刈り仕事にうまく置き換わっていたからで
す。この技術は手刈り技術を否定することがな
かったと言ってもいいでしょう(その点で、除草剤
による畦の除草技術は、それまでの仕事の一切を否
定しているのです、なかなか普及しませんでした。
ちなみに田んぼの中の除草剤も当初はなかなか普
及しなかったことは留意しておいていいでしょう)。

上部技術だけを暴走させるのではなく、その土台
に土台技術を接合することによって、農業技術が農
業生産を狭い世界に押し込めてしまわないように
するのです。生きものの生死へのまなざしは仕事
の中だけで伝承するのではなく、「土台技術」として
伝承・表現する道が見えてくるのです。

生きもの調査はそういう「土台技術」の形成の方
法としてとても有効です。しかし、それは上部技
術に接合されなければ、単なる試みに終わるかも
しれません。そこで、その接合の場面をみていき
ましょう。

5節：百姓の天地観(略)

6節：なぜ「天地自然」に惹かれるのか

(1) 自然の有情への親近感

日本人が自然に惹かれる理由の表層は、まとめて
みると、おおまかに二つの答え方があるような気が
します。まずは対象としての自然の有情(生きも
の)に惹かれるのです。赤とんぼ(精霊とんぼ)が
夕空に群れ飛んでいます。夕日が羽に反射してき
らきらと、光っては消えて散乱しています。うつ
とりと見とれます。この風景を眺めながら、次第
にその中に吸い込まれていくような気になります。
まるで自分も赤とんぼになって、夕空に漂っている
ような感じになります。

それは、自然と人間を分けず、「自然
(Nature)」という言葉を持たず、「天地」とい
う言葉しか持たなかった時代の名残かもしれませ
んが、人間と生きもの(有情)の垣根が低く、生き
もの同士だという感覚があるからでしょう。英語
のNatureのように、人間(自分)と対象を
きつぱり分けて、対象である生きものを観察して、
色がきれいだとか形が素敵だとかいうのとは違
います。ただちに可愛い、きれいな、すごい、ぞつとす
るといような感覚なのです。

百姓の場合は、とくにいつも見慣れている生きも
のがほとんどなので、親近感が土台にあります。
「今年も、また会えたね」というような感じがして、
惹きつけられるのです。とくに風景はそうです。
風景とは生きもので満たされていますが、一つ一つ
の生きものではなく、その全体に眼が惹きつけられ
る時に風景が出現するのです。とかく風景を画面
(景観)として語るのが主流ですが、その背景には
生きものの息吹があるからこそ、風景は人を惹きつ
けるのではないのでしょうか。

私の在所の谷の東方の山肌は樗や椎などの照葉

樹林に覆われていますが、五月になると色とりどりの新緑が吹き出て、まるで花が咲いたようになりません。私もどの色がどの木の新葉なのかよくわかりませんが、とにかく生気が溢れているこの風景が大好きです。こういう世界に見下ろされて私の村は存在しているのだと感じると、とても嬉しくなるのです。

(2) 自然との一体感

次に自然を対象化しないで、その中に入り込んで包まれてしまう境地がいいのです。自然と一体になる境地だと言いつてもいいでしょう。前にも述べましたが、自然(Nature)の原意に忠実になるなら、「人間も自然の一員である」ことはありえません。ところが、現代の日本では若い人も年寄りも、ほとんどの人が「人間も自然の一員である」と感じているのです。それは「自然(Nature)」を人間も含む天地の意味で使用しているからです。

しかし、よく考えてみると、人間が自然と一体化するというのは、不思議な現象です。私が自然と一体化している姿を、外部から眺めたらどうでしょうか。まさか、私の姿が消えてしまつて、田んぼの稲に同化しているわけではないでしょう。しかし、一心不乱に田んぼで働いている姿は、まるで田んぼの一部のように見えているかもしれません。

これを私という人間の内側から見るとどうなるでしょうか。百姓はしばしば仕事に没頭していると、時の経つのも忘れず。もちろん、経済のこと、家族のことも、我すら忘れてしまいます。当然

ながら、悩みも欲望もどこかに消え去っています。そして、我に帰ると(意識が強くなると)、もう日も傾いていて、回りを見回すと天地自然に囲まれているのです。ああ、そうか、天地自然に包まれ、天地自然と一体化していたのかと、やっと気づく(意識する)あります。

この境地はなかなかのもので、百姓仕事を楽しんでいる時の核に居座っているものです。ところが、何しろ忘我の境地なのですから、この状態を記述しようとする、「仕事に没頭して楽しんで楽しかった」という以外に言いようがありません。外から見ても、内から見ても、なかなか核心はつかめません。どうしたら、核心に迫ることができのでしょうか。

(3) 百姓の姿勢

農業技術が「つくる」という視点を百姓に浸透させる前の百姓は、農業生産を「天地のめぐみ」として受けとっているという「天地観」を持っています。ただし、受けとり手は、田畑や作物です。この場合に、百姓はどういう態度や気持ちを抱いていたのでしょうか。ここでもう一度、農本主義者に登場願ひましょう。まず橘孝三郎の言葉を聞きます。

「農業においては、農民の抱ける生産客体への愛護の精神的要素こそが、生産を左右する根本的要因をなすものであり、この精神的要因を無視して農業生産なるものは成立し得ないのである。」(『農本建國論』昭和10年)

彼が言う「精神的要素」とは何でしょうか。それをもっと雄弁に語っている百姓がいます。松田喜一のことは聞きましよう。

農業の相手は農作物である。農作物は天地の力で育つのである。したがって「農作物もまた天地である」。そしてその天地の霊力で育つ農作物を、人間がお手伝いをして育てるから、天地と人間とが農作物を通じて完全に握手をしているわけである。これが農業である。だからこそ「農作物の心がわかる者は、天地の心がわかる者」である。

それでは、農作物の心はどうすればわかるか、それは「神の技」あるものは、みな農作物の心がわかるのである。作物の前に立てば、作物の訴えが聴こえる。声なき声が聴けるのである。農作物と話ができるのである。これが「入神の技」である。故に我々の職業では「農技を通して天地の声が聴ける」のであり、「天地の御心すなわち農魂」であるから、結局「農技なければ農魂なし」である。(『農魂と農法・農魂の巻』(昭和26年刊))

この場合の「農技」とは農業技術ではなく、天地の声を聞く能力であり、農作物と話ができる能力なのです。私は若いころ「稲の音が聞こえるようになっていこう」とよく百姓から言われましたが、現在ではこういうことを言う百姓は、ほとんどいなくなりました。どうしたら稲の音が聞こえるのでしょうか。

たぶん現代の若い百姓は農作物を対象として、自分の外側に見ています。もちろん、観察はしているのですが、農作物と話ができるほど近くまで寄らないのです。もちろん、愛情は注いでいるのです

が、それよりも労働時間や経済性が頭をよぎるので、それが「経営能力」なのだから、しかたがないのです。

(4) 稲や林檎の木になれるか

松田喜一とほとんど同じことを、じつは橘孝三郎も語っていたのです。

「百姓は百姓が林檎を作るんじゃ駄目だ。百姓はその林檎を作る林檎にならなければいかんのだ。もつと百姓はこのまま大地にならなければ駄目だ。大地に生まれ、大地に育つのだ。だから百姓が大地にならなければ、どうしてうまく育てられるか、それが私の百姓である。」(血盟団時間公判記録の井上日召の証言による。『血盟団事件』中島岳志より)

私は林檎を栽培したことがないので、稲に置き換えてみましょう。稲の声が聞こえるということは、百姓が稲になることでしょう。稲の痛みを我がごととして同情し、稲の喜びを我がごととして嬉しがることでしょう。肥料が足りない稲が肥料を欲しがっていると感ずるのです。決して窒素濃度が下がったから、窒素を追肥するのではないのです。

「百姓が大地になる」とは、こういうことでしょう。大雨になると夜中でも雨合羽を着て、懐中電灯を持って田んぼに急ぎます。川からの水路が溢れているのではないか、田んぼが冠水しているのではないかと心配になるのです。田んぼと稲が私を呼んでいるのです。

干魃の年に、バケツで水を汲んでかけている百姓

を見たことがあります。ほとんど「焼け石に水」でしょうが、効果があるかどうかではなく、そうせざるをえない心情なのです。まして費用対効果などという尺度は微塵もありません。松田喜一はさらにわかりやすくこのことを表現しています。

「農作物が図抜けてよくできつつある。朝起きるとすぐに見に行く。今しがた見たばかりである。一時間や二時間の間にそう変わるものではないことは知りつつも、見に行く。夕方はいよいよ廻り道までして見に行く。このように農作物から魂を奪われ、朝は寝て居れないから早く起き、昼は暇がおしくて遊んで居れないから働く、何処に朝起きが辛い、何処に働かざるが苦痛か、これらはみな目的物から心を奪われ、己を忘れて、相手本意になつておればこそである。これが「忘我育成」の「農魂」である。」(『農魂と農法・農魂の巻』)

「魂を奪われる」ということは、現代人でもあるでしょう。作物や田畑を前にして「相手本位になる」ことは、自分本位つまり、人間中心ではなくなり「忘我」となるのです。これこそが天地への没入、天地自然との一体となることなのです。この精神性に注目すべきです。

(5) 自然に帰る

私は一昨年の春、農文協から『愛国心と愛郷心』という本を出しました。主題は「愛郷心」を土台にした農本主義によって、愛国心に支えられた資本主義を撃つことでした。私が農本主義に関心を持つ

ようになったのは、橘孝三郎や松田喜一のように農本主義者の「天地自然観」に共感したからです。

昭和初期には、急速に工業が台頭してきていました(大正時代に工業生産額が農業生産額を上回るようになりました)。百姓ですら工業へ、都会へとなびいていく風潮に、農本主義者は危機感と嫌悪感を抱きました。だからこそ、百姓仕事を救い出す思想的な根拠を必死でさがしたのです。したがって、彼らの一番の特徴は、「農とは何なのか」と深く問い詰めていることです。現代の百姓や農業専門家が忘れてしまっていることです。そして、とうとう「農の本質(原理)」の決定的な答えにたどり着くのです。

これまで述べたように百姓としては、時を忘れ、我を忘れ、悩みを忘れ、経済など眼中になく、百姓仕事に没頭しているときが一番、幸せです。そして、はつと我にかえると、天地自然に囲まれている自分がいるのです。ああ、もう日暮れか、と気づきます。こういう人生こそがもつとも人間らしいのだと、農本主義者たちは発見したのです。この境地とは、「自然に帰る」「自然に生きる」ということでした。

ここにこそ「日本人はなぜ天地自然に惹かれるのか」という問いへの、最も深い答えがあります。しかし、なぜ「自然に、自然な、自然のまま」の生き方がいいのでしょうか。これに対する答えは、もう昔から言い古されてきました。そういう境地は(人間のような)欲がなく、悩みがなく、とらわれがないからです。

百姓が生きもの(有情)に惹かれるのは、生きものが(人間とちがって)自然に生きているから、と

忘れるひとときは、生きものに戻って、自然のままに生きていると感じるからではないでしょうか。

(6) 捨ててはいけない仕事

農業の世界でも、近年、脚光を浴びているのは、無人トラクターやICT(Information and Communication Technology)などの、人間がやる仕事を直接、人間が手を下さずにやる技術です。たとえば、田んぼの水管理をICTでやれば、田んぼに行かなくて済みます。決めておいた水位を下回れば自動的に水が流入するようにプログラミングしておけばいいのです。画像も受信できます。これで浮いた労力と労働時間を他の仕事に振り向けることができます。

また、「翅のない天道虫の育種」が注目されています。天敵である天道虫を飛ばないようにして、定着させるのが目的なのでしょう。こうした新しい技術はこれまでの農業技術とは、異質なものを含んでいます。これまでは、「省いてはいけない」とされてきたものを、捨て去るだけでなく、そうした禁欲を解き放ち、欲望に変えるからです。

省いてはいけないときれたものは、農本主義者が口を酸っぱくして言い続けた「作物への情愛」であり、「天地自然に包まれる境地」であり、「天地有情の感覚」です。「農の本質」だと言い換えてもいいでしょう。田畑に足を運び、自ら手入れをするからこそ、相手へのまなざしは豊かになり、情愛は強くなり、天地自然の力に対する感謝を実感でき、同じ生きもの同士が同じ世界に生きているという充実

を得てきたことが、すつぱり見捨てられています。

つまり、資本主義的な生産性を上げようとする欲望に歯止めをかけてきたものが、とうとう失われようとしているのです。こういう習慣を失うならば、百姓は「自然に生きる」ことが困難になります。こうした危険性に対する恐れがまったくないのが、これらの技術思想の特徴です。とうとう農業の近代化は、ここまで来たのです。このことは仕事の喪失にとどまらず、農の本質の亡失になることを一つの寓話で示しましょう。

最新AI(人工知能)装備の無人トラクターが田んぼに入る前に、動かなくなりました。理由は「この田んぼは狭くて、効率が上がらないので、耕作する価値がない」と判断したからです。条件の悪い田畑も誰かが耕作しなければ、村は荒れ果ててしまうことを、このAIは理解できないのです。そこで、「愛郷心」をプログラムに組み込んだら、解決しました。

ところが、次の場合はもっと深刻でした。「田んぼが広すぎて、単純作業で面白くない」と言つて、無人トラクターが動かこうとしないのです。

持ち主は考え込みました。田んぼを耕しながら、鋤き込まれていく草や、逃げ惑う鼠や、耕されて黒く変わっていく土の色に、わが宇宙を感じていたのに、機械にとつては単純労働でしかないのか、とあらためて驚いたのです。

このAIのプログラマーは、無人トラクターによって、百姓が単純労働から解放されると思つていたのでしょうか。ところが、百姓はそうは思つていなかったのです。そこで、鳥の声を聞き、村の風景

を眺め、土の香りを含んだ風に包まれることを「仕事の充実」だと感じるように、AIを改良してもらいました。

ところが、百姓は嬉しそうに田んぼを走り回っている無人トラクターを眺めていて、大きな寂しさに襲われたのです。自分は大事なものを機械に譲り渡したのではないかと不安になったのです。

現代人は「自然に飢えている」と言われています。この時の自然は、天地自然でもあり、おのずからなる生き方でもあるでしょう。

しかし、おのずからなる生き方は資本主義的な欲望の肥大化に対して、連戦連敗を喫してきたと言つてもいいでしょう。その原因は「本来の正しいあり方」、つまり、原理や本質を「自然」の中に見いだし、資本主義的な原理に対抗させる気持ちがないからです。そういう発想をすることがないからです。そういう習性を日本人は持つていないからです。

7 節：農の本質を求める(略)

8 節：無意識に支えられている天地自然

― 農の本質へのもうひとつの接近 ―

この節は、百姓が無意識に見ている世界が大切であることを、それが現代社会では衰弱していることを証明しようと考えています。しかし、こんなことは少なくとも農の世界では、前代未聞のことでしょうし、はたしてうまくいくか自信がありません。ぜひともご批判、ご助言ください。

(1)「無意識」という言葉

「無意識」という言葉は、とても便利なもので、現代人はよく使います。駐車場に車を止めて、会場に向かいながら、「あれ、車の鍵はかけてきたかな」と不安になり、車に戻ると、ちゃんと鍵はかけられています。「無意識にかけたのだな」と納得します。あるいは、考え事をしながら運転していても、ちゃんと自宅に到着しています。まさか無意識にハンドルを握っていたのではないのですが、道中のことなどまったく覚えていません。「無意識に運転していた」と言うしかありません。しかし、赤信号ではちゃんと止まっていたのでしようが、それも忘れていきます。

また、熟練した仕事をする時には、「無意識に身体が動く」とも言います。とっさの時に身体が動くのも無意識でしょう。

このように、自覚していないこと、意識していないこと、覚えていないこと、忘れてしまっていることはいっぱいあります。それを「無意識でやっている」と言うなら、私たちの人生の半分以上は無意識の世界でしょう。最近の脳科学では、無意識であるときも脳はちゃんと活動していることがわかっています。なぜ意識されていないのかは、よくわかっていません(そもそもなぜ意識が生まれるのか、脳科学ではまったくわからないのですから)。

ところが、「無意識」という用語は、フロイトやユングなどの精神分析の世界で用いられ始めたために、精神分析の特別な用語であるという印象がつきまとい、なかなか正面切っては使いにくいもの

です。

小浜逸郎は『無意識はどこにあるのか』(洋泉社 1998年)でこう言っています。

「無意識と呼ばれるものが実際にあらわれる場合、それは常に意識に寄り添うかたちで、ある意識に気づかれるという仕方であらわれる。その意味では、意識自身が自分を越えたものを意識させられるという現象である。」

まったくそのとおりです。無意識は気づかれてはじめて(意識でとらえられてこそ)、無意識として自覚されるのですから。たしかに、無意識はそれが働いている時点では、意識できません。意識できているなら、無意識ではなく、意識そのものです。後になって、あるいは他者(の意識)によって、無意識だと気づくものなのです。

小浜の視点に私が惹かれるのは、次のような箇所です。

「時を忘れて名曲に浸るといような場合、私たちは「時間」を意識しないにも関わらず、かえってそのことによって、もっともよく「時間性」のさなかを生きていると言える。「時間性」を「時間」として意識するのは、タムリミットが近づいていることに気づかされるときなどである。」

百姓仕事に没頭して、時の経つのも忘れていくときにはもちろん、「時間」など意識していませんが、無意識の世界ではじつに豊かな「時間」を過ごしているのです。小浜は人間が自分の臓器を意識する

のは、異常があったときであることを例にあげて、意識が臓器(身体)のことを忘れている状態(つまり、無意識の状態)こそが、私たちの身体性(生、生き方、人生)を実現させている、と表現しています。なるほどと、納得しますが、普段はこんなことを意識することはありません(だから、無意識に支えられている、と言えるのです)。

たとえば、私たちはオタマジャクシを見ると、「オタマジャクシ」と気づきます。この「オタマジャクシ」という名前をどこで、誰に教わったのか、覚えていません。また、この名前が「日本語」であることなども、意識しません。まして「オタマジャクシ」はなぜ、田んぼに多いのだろうか」と日本語で考えている自分が、いつのまにか「日本人」になってしまっていることも自覚していません。すべて無意識のことなのです。しかし、これらは決して遺伝子に組み込まれていたものではなく、いつのまにか習得したもののなのです。

本稿の中で最大の発見(ちょっと大げさですが)は、農とは、本人が意識しない世界に支えられて営まれているのではないか、ということ。それは百姓仕事をしているときに、よく現れています。

私たちは現代の日本国で生きていますから、「自然観」というものは、個人的なものだと思いきや、各々が経験し積み重ねて形成するものですから、まちがっていないような気になります。ところが、その個人的な経験が、決して個人的でないことにすぐ気づきます。たとえば、生きものの名前は学校に上がる前から、家族や在所の人たちから習ったものがいっぱいあり、そのほとんどが在所の言葉(地

方名)なのです。つまり、家族や在所の人間が呼ばない名前は、覚えるはずがないのです。という事は、在所の人間が関心を示さない天地には関心を向けられないように教育された自分が、そこにいます。

この在所の見方こそが、自分の天地観の土台だとすれば、その歴史を(蓄積を)遡って行かなければならなくなるのです(私は異郷で百姓になりましたが、一番、困り果てたのは、この在所の天地自然観がなかなか身につかなかったことです。そういう蓄積がないのですから、無理ありません。新規参入の百姓の悩みの土台にあるのは、このことなのです)。これは、言葉を換えると「愛郷心」にもなりません。

さて、わざわざ表現する必要もないと考えられてきたもの、つまり、無意識に感じておればすむものをどう表現したらいいのでしょうか。私はこれととりあえず「無意識の天地観」と呼ぶことにします。さて、この無意識の天地自然観と言ふべきもの自身につけて、私たち百姓は日々田畑に通い、仕事をし、あるいは農業技術を行っています。したがって、仕事や農業技術は、百姓を通して、この天地観から影響を受け続けている、と言つてもいいのですが、誰もそうは考えないのです。

(2) 無意識に見ているものが多い

百姓は稲を育てるために田植えをするのであって、赤とんぼを育てるために田植えをしているのではない、と言われている。つまり、稲作技術というものに赤とんぼを育てる技術は含まれていない

のです。それにもかかわらず、赤とんぼにとつては、田植えしてもらわなければ、産卵できないし、ヤゴも生育できません。そこで、田植えという仕事には、赤とんぼを育てる「機能」がある、と言っしかない、というのが常識になつています(生態学では、赤とんぼは田んぼに適應していると言つが、同じことを百姓を切り捨てて言っているだけです)。

しかし、ほんとうにそうでしょうか。人間の力や技、まなざしが及ばないところで生成するものを「多面的機能」と呼ぶ(あるいは適應と呼ぶ)ことによつて、思考停止に陥つて、農にとつて大切なものを見落としてしまつていないでしょうか。

私は「百姓は無意識に見ている、無意識の天地観に導かれて、ほとんどの百姓仕事をしているので、無意識に生きものの生に対応している」と主張したいのです。

しかし、無意識であれば、意識していないわけですから、「気づいて」はじめて、存在が分かるものです。その「気づき」がやって来なければなりません。私がここで述べているのは、無意識の世界を気づいてもらうきっかけになればと考えてのことです。気づくのは、他人による指摘に反応するときや、時間が経つた後でふりかえるときです。あるいは、異常事態になると、それまで何気なく(無意識に)見ていたものや、していたことが、「無意識にしていたのかもしれない」と気づきます。

そこで、もう一度「田まわり」という田んぼの稲や水を見て回る仕事に戻ってみましょう。百姓は意識的に稲と水を見てるようにみえます。しかし、田んぼに到着して、最初に感じるのは、田んぼ

の世界の雰囲気です。「何かおかしい」と感じるのとがあります。そういう時には、普段とは違うことが起きています。たとえば、水が切れていたり、稲に病気が始めていたり、猪が田んぼに入つていたりするものです。

ある年のことでした。田んぼに行くと、異常な気配がするのです。一枚の田んぼだけ、うっかり水が切れていて、オタマジヤクシが干上がつて、白い腹を見せているのです。あわてて、上の田んぼの水口を全開にして、水を注ぎ込みましたが、手遅れでした(あえて数値を示すなら、10aで20万匹のオタマジヤクシが死んだのです)。この時に、あらためて、はつきりと、私は田まわりの時に、無意識にオタマジヤクシも見ていたことに気づいたのです。

それまでは自分の「田まわり」の仕事が、オタマジヤクシの命を支えていることを意識することはありませんでした。オタマジヤクシが田んぼで泳いでいるのは、あたりまえのことで、「今年もまた生まれ続けている」と意識することもありませんが、とくに人に語ることもなく、まして田まわりや農業技術との関係を意識することはありません。ほとんどの百姓にとつてもそうでしょう。

ところが、異常事態の時に、それまで無意識であったことが、意識化されるのです。無意識に見ていたことが、「気づかれる」からです。ここから私にとつては、本格的に「無意識」の世界の扉が開いたのです。

(3) 無意識のありか

無意識とは、意識されて(気づいて)はじめて「無意識だった」と知れるのです。したがって、意識化(気づき)がなければ、そのまま過ぎ去って、なかつたように思われてしまうのです。

小浜逸郎は、無意識の世界に気づく契機を三つあげています。(1)時間：無意識の世界に追いやって忘れていたことを思い出すことがあります。「ああ、そうだったのか」という気づきは、時間が経ってからやってくるものです。(2)他者性：その気づきはむしろ本人よりも他人によって、気づかれることが多いものです。「何か、体調がわるいのではないですか」と他人に言われて、自分では気づかないようにしていたのに、無意識に顔の表情にでていた、というようなものです。(3)身体性：自分の身体の働きは、普段は気づきにくいものですが、異常があると気づくことがあります。手植えをするときに左手の指の動きなど意識することは無いのに、「虫に刺された葉指が気になって、苗送りが遅くなっている」と意識し、苗を送る左の指の動きをたびたびチェックしたりするのです(ちなみに、わが家では苗代の苗を、7日かけて手植えしています)。

ところで、異常事態によって百姓仕事の隠れていた役割に気づくのは、上のどのケースにあたるでしょうか。たぶん下條信輔が『意識』とは何だろ(講談社現代新書1999年)で言っているように、無意識とは意識の周辺部にいくらでもあるもので、何かのきっかけで、意識でとらえることができるものなのでしょう。

問題は、この無意識を百姓仕事に限ってでもいから、意識化する方法を見つけれないか、ということ。なぜなら、無意識に注目して意識化

することができれば、新しい農業技術論が提案できるだけでなく、「無意識の天地自然観」を表現することによって、「農の本質」に迫ることができからです。

稲のために水をためる仕事は、決して偶然ではなく、たまたま結果的にそうなっているのではなく、まして自然現象ではなく、また、人間が係わっていない田んぼの機能ではなく、オタマジヤクシの生を感得して来た伝統的な天地自然とのつきあいが無意識に働いているからです。そういうように理解することで、「農の本質」が見えてくるのではないかと感じます。

(4) 農業技術の狭さ

この無意識の仕事世界の奥深さ、広大さに比べれば、「農業技術」はあまりに狭く、時代の価値観に従属しています。それだけではありません。「技術」はあくまでも意識化された世界のことだけです。

そこで、逆説的ですが、武谷三男の技術の定義「技術とは生産過程における、科学的な法則性の意識的適応である」がよくできている理由が判明します。つまり、技術とはあくまでも人間の意識下にあるもので、その意識も科学的で合理的なものでなくてはならないのです。どこまでも人間が主役であるというところに、近代技術の特徴がよくでています。

しかし、私たち百姓は技術を行使しながら、科学的な法則性の適応を意識し続けているのでしょうか。そんなことはありません。百姓仕事の中では、技術を行使していても、法則性など忘れてしまつて、

仕事に没頭してしまうことが多いでしょう。つまり、意識した技術を身につけると、無意識のうちに体が動くようになるのです。むしろ無意識の世界の上で、意識的な技術が利用される、というようなものでしょう。これは「百姓仕事に農業技術を組み込む」と言い換えてもいいかもしれません。

なぜ、こうした事態になるのでしょうか。その理由は二つ考えられます。

まず一つめは、伝統的な百姓仕事の世界は、たしかに前近代の天地観を濃密に引き継いでいますから、主役は人間ではなく、天地なのです。たしかにそこに「天地の則」が働いていることも事実ですが、それは決して人間が把握した「自然法則」ではなく、天地の則を人間が推測するだけなのです(ついこれまでも使ってきた「伝統」という日本語は、明治期に造語されたことでも分かるように、近代化に対抗するもう一方を指すもので、近代を意識しないと使えないものなのですが、現代ではそれも失念されています)。

このことは深刻な反省を私たちに突きつけてきます。科学を駆使して研究開発されてきた農業技術では、天地のことはごく一部しか扱えないのではないかと、という反省です。稲作技術に、オタマジヤクシを育てる技術を組み込むことは不可能ではないでしょう。たしかに「環境保全型農業技術」というものが形成されつつありますが、あくまでも現代の研究者や百姓がつかんでいる意識下にある狭い世界でのことです。しかも、さらに事態を悪化させているのは、次ような事情です。

現代の農業技術はあくまでも、現代の農政の方針に沿った「生産性をあげる」枠組み中で組み立てら

れています。たとえば、農政が推奨している、畦に黒いマルチを貼る技術などは、除草剤は使用しないかも知れませんが、畦で生きていた生きものなど、眼中にありませんし、田んぼの風景の破壊になることなど、考えることもないでしょう。百姓は無意識に田んぼの風景を毎日見えています。畦に咲く、四季折々の野の花に惹かれることは、たしかに他人に公表・表現することではなく、すぐに忘れてしまうことです。百姓の「美意識」を無意識に育んできたものです。そういう視点が、現在の環境保全型農業の多くにはすっぱり欠如しています。

さて、オタマジャクシを育てるために、オタマジャクシの餌となる植物性プランクトンを繁殖させるために、代かきの水をできるだけ捨てずに、田植え後35日間、一時も水を切らさないように気をつけて、成体となった蛙のための餌にも留意をする技術は形成可能ですが、蛙への「環境支払い」が実施されていない日本国では、確実に生産性を落とします。したがって、そういう技術を行使するのは、個人的な情愛の発露にすぎないのです。これでは普及しません。

それにもまして、百姓には「そういうものは技術で保全するものではない」という感性があります。天地の諸相は、天地のめぐみとしてもたらされるのであって、人間が意識的に技術で形成していく（保全する）ものではない、という感覚です。

そこで、百姓に「では、どうして保全していくのですか」と問い詰めてみましょう。ほとんどの百姓は、答えに窮します。なぜなら、それは「意識下」にないからです。無意識に天地の則を外さずに百姓仕事に専念しておれば、道を踏み外すことなく、

天地のめぐみは保全されるのです。この場合の天地のめぐみとは、天地有情の感慨であり、有情の生であり、有情で満たされた風景であり、天地そのものでもありうるのです。

たとえば、田んぼの畦を毎日歩くから、よく踏みしめる中央部には大葉子や力芝、雄ひ芝などが繁り、外側のよく乾く部分の畦には、あざみや金鳳花、葦、嫁菜が咲き、田んぼ側の湿った畦には、蛭蓆や日照り子、高三郎や大地縛りが咲くのです。でも、そんなことは他人から（私から）言われてはじめて気づく百姓がほとんどです。無意識の世界で感じているだけなのです。

さらに、もう一つの理由は、百姓仕事で使う百姓の身体に宿っています。技術の対象（たとえば、稲）は、私の身体の外側にあります。しかし、稲を植える私の身体は、私のもとにあり、対象化できません。いわば無意識に動いたりするものです。仕事があまくいけばいくほど、私たちは仕事をしている身体を意識しなくなるものです。そして、その相手である作物も。

技術は百姓の身体から切り離すことができますが、仕事は切り離せないのです。しかも、百姓仕事の場合は、この身体が天地自然とつながっていて、生きものへの配慮は無意識に身体に蓄積しているとしか思えないので、身体から切り離された（近代の）農業技術では、天地有情の世界を扱えない、と言うべきです。

(5) 無意識の技術はあるか

(前略)

この数年、講義や講演に招かれると、次のような質問をするようにしています。

「うっかり田んぼの水が干上がってしまったって、オタマジャクシが死んでしまいました。あなたは百姓として、どう感じますか。次の三つから選んでください。」

- (1)「すまなかつた。ごめんな。」
- (2)「惜しかった。蛙にまで成長したら、天敵として害虫を食べてくれたのに。」
- (3)「仕方がない。死骸は分解されて有機質肥料となって稲に吸われれば、それもいいだろう。」

私たち世代より上の年齢の百姓は圧倒的に(1)なのですが、若い百姓は(1)(2)(3)それぞれ1/3に分かれます。これはどう考えたらいいでしょうか。

先ほどの「生きもの語り」でも、生きものたちのほんとうの主張は、コスト意識ではなく、自分たちオタマジャクシの命でもなく、生きものとの人間の関係の死守にありました。ようするに百姓の生きものへのまなざし、情愛こそが問題の核心だったのです。

くり返しになりますが、百姓は田まわりの時に、無意識に、水の中の生きものにもまなざしを向けているのです。その証拠に、うっかり水が干上がって、オタマジャクシやヤゴや目高が死んでいると、(1)のように「すまなかつた、ごめんよ」という後悔の念が湧き上がってきます。仕事は無意識に生きものを育てているのです（そして、場合によっては、無意識に殺しているのです）。技術は生きものを殺していることに（無意識に）鈍感です。技術は

無意識の（そして、共同的な）世界には、手が出ません。

しかし、その無意識のまなざしが若い百姓には希薄になっていっているとしたら、どうしたらいいのでしょうか。これこそが、農の危機ではないでしょうか。生きものの調査は、この無意識の世界に手を伸ばす訓練なのではないかというのが、私の言いたいことです。生きものの生の力を借りないと、近代化には刃向かえないのです。

農業技術の中に、天地自然への無意識の感応を含ませることは、たぶん不可能でしょう。だからこそ、百姓は「科学的な法則性」を「意識的に適応」させるために百姓仕事をするのではなく、「せねばならないからやる」気持ちを持していけることが大切だと思います。なぜ、しなくてはならないと判断するかというと、「天地や作物や田畑がそう要求している」からです。科学的な法則性も無用とは言いませんが、百姓が何よりも感じとり、聞くべきは、「天地の生きものの声」なのです。

（6）無意識の愛郷心

近代的な国民国家は愛郷心を植え付けるのには熱心ですが、愛郷心が薄れていくのには冷ややかです。愛郷心は積極的な価値ですが、愛郷心は無意識のなかに沈んでいることが多いのです。東日本大震災の津波で田畑を失った百姓の話です。

津波にのまれ、跡形もなくなった田んぼを見て、その百姓は「もう百姓をやめよう」と思ったそうです。しかし、ときが経つにつれ、「この田んぼを干拓で拓いた先祖の思いに比べれば、復田などたいし

たことはない」と気づいたそうです。

また、ある百姓は、放射能の汚染で稲作が禁止された田んぼの上を、燕が飛んでいるのを見て、「代かきしないと燕も巢作りができないだろう」と思っ

て、代かきだけはしたそうです。在所の天地有情の共同体を、現代の価値観だけで眺めてはいけません。時を超えて伝えられてきた情念があります。それは内からのまなざしであるときに、はっと気づくものでしょう。百姓は、田畑だけを継承しているわけではありません。情念とまなざしもまた引き継いでいるのですが、それは常時には気づかないものです。いわば無意識の世界に埋もれているものです。

東日本大震災のときに、農業普及員の対応を聞き取りしたものは『聞く力、つなぐ力』（日本農業普及学会編・農文協）として刊行されています。この本を読むと、被災地の普及指導員は、外からのまなざしで「復興」（経済価値の復興と言ってもいいでしょう）が優先される中で、しっかりと内からのまなざしで見ていることがわかります。外からでは見えな

いものが、内からでは見えるのです。そのときの「見えないもの」とは、何でしょうか。

「ありふれていて、いつもそこにあるもので、大切なものだけれど、普段は気づかないもの」なのです。それが失われる異常事態になると見えてくるのですが、外からのまなざしではそれは見えたとしても「現象」としてしか映りません。一方の、内からのまなざしでは見えないものとは、おもいや情愛や情念や経験や記憶として立ち現れます。したがって、一人一人それたちがうものなのです。それまで無意識の世界にあったものが、大震災の中

で意識の中に浮かび上がって来て、それが言葉になるときに、聞く人（普及指導員）がいることはとてもよかったです。

しかし、それがほんとうに大切なものなら、なぜ普段は気づかず、無意識の世界に埋もれているのでしょうか。気づかないから、農政や農学の対象とはなりえなかったのですから、それが見えてきたとしても、ほんとうに「大切なもの」だと認識されるのでしょうか。

普段の百姓は（消費者も）無意識に、当然のように（所与のものとして）、燕や田んぼや食べものを、あたりまえのものとして、そこにあるものとして、見えています。この「無意識に見ている」ことを「意識化」することは、異常なことなのですが、一つの「発見」をもたらします。その発見とは天地自然と人間の関係に係わることであれば、「農の本質」の発見につながるものなのです。

「現象」ではなく、無意識に体の中のどこかにあった「おもい」こそが、「農の本質」の核ではないか、と言いたいです。これを「表現」しなければ、忘れられていきます。外側にいる普及指導員が、百姓の内からのまなざしに耳を傾けて「聞く」という行為は、じつは「表現」を引き出す数少ない契機となったのです。言葉にするということは「表現」そのものですから。

問題は、（1）そこに「本質」を読み取る（意識化する）「方法」を身につけているかどうかで、「表現」にちがいができますし、（2）それを「書く・記録する」ことによって、「本質」をより鮮やかに、伝える気持ちが生まれます。（3）そこから「方法」を問い直し、作り直す「学」が日本農学にならないからこそ、新しい

学が生まれなければならないのです。無意識の世界に降りていける「学」です。「小農学」もこうした世界を切り開いていくのです。無意識の「愛郷心」とは、そういう意味で新しい学の対象なのです。

9節：農と宗教の関係

わが家には仏壇も神棚もありますし、私はもともと仏教が大好きで、般若心経は母親が毎日唱えていたので、そらんじることが出来ます。しかし、現代の仏教には深い不信感を持っています。一言で言えば「近代化を批判しない宗教は信じられない」からです。

そういう私が論じる宗教論ですから、煩惱まみれのものになっていくことはお許しください。

(1) 百姓仕事と宗教

3節でも強調しましたが、百姓仕事ほど、生きものを殺してしまう仕事はありません。田を耕せば、草を殺し、ミミズを殺し、越冬している蛙を殺します。代かきすれば、虫を溺れさせ、草を殺し、稲刈りすれば、稲を殺し、稲についていた虫を殺します。間引きすれば、作物を殺し、選種すれば、種を殺し、転作すれば、とんぼや蛙を殺し、農薬を散布すれば、生きものを殺します。

これほどおびただしい生きものを殺しておきながら、天罰が下ることもなく、祟りがあるわけでもなく、この殺生を苦にして自殺した百姓も知りません。これは一体どうしてでしょうか。どんなに殺生しても、また草は生えてくれ、生きものはまた生

まれてくれるからでしょう。それというのも、百姓仕事は農薬の登場までは、生きものの息の根を止める(根絶させる)ことがなかったからです。

このことはどんなに感謝しても、感謝し過ぎることではないのに、誰に、何に感謝すればいいのでしょうか。

それは天地に向けて、頭を垂れるものでしょう。百姓は作物である生きものををつくることはできません。それは天地からのめぐみとして、受け取るしかありません。せいぜいありがたく引きだしてくる技能を鍛えるしかありません。その天地の一部を人間ができる範囲で、豊かにできたことに満足することの幸せがあるだけです。この天地に包まれて、生かされているという感覚は、いつの間にか百姓が身につけたものであり、宗教心そのものではないでしょうか。

この感覚こそが、日本の神道や仏教や様々な新興宗教に取り入れられ、注ぎ込まれてきたと言っているでしょう。私たちが、様々な宗教に親近感を抱くのは、ここに原因があります。

そうであるなら、農業をしている日本人以外にも同じような感覚があるはずで、そのうちの一つを示してみます。

フランスの画家ミレーの「落ち穂拾い」の絵で、落ち穂を拾っているのは貧しい人たちだという話は有名です。百姓が拾わずに残しておいたものなのです。神の恵みである麦を、貧しい人にも分け与える精神は、自然は神が創造したとするキリスト教ならではの価値観だろうと思っていたのです。

ところが、10年ほど前に、近在の村で93歳になる年寄夫婦から話を聞く機会があったので、落ち穂拾

いの話をしたら、「田んぼの落ち穂拾いは、百姓はしてはならないしきたりだった」と言うのです。稲刈りが終わる頃になると、知らない人が袋を持って畦で待ちかまえていた、という話に私はほんとうに驚いてしまいました。ここには近代的な所有や生産の論理ではないものが、くらしを貫いています。こういう自然共同体は、天地自然のめぐみの下で、国民国家とは別のところで形成されているのです。すでに希薄となつてはいますが、この天地有情の共同体に依拠して生きていく精神は引き継がなくてはと思います。

宗教はまったく異なるのに、遠く離れた国なのに、洋の東西を問わず、百姓にはキリスト教や仏教よりもさらに古く深い、共通の感覚があるのだと実感させられます。これはたしかに「農の本質」であり、宗教心の発露そのものです。資本主義や国益とは無縁に、価値や有用性を越えたところに流れている地下水のようなものです。

ところで、現代人には農本主義も宗教のように感じる人が多いようです。宗教では「教義(教理)」と言われるものが、農本主義では「農の本質」ということになります。ただこれまでも語ってきたように「農の本質」とは、教主がいて外からもたらされるものではなく、一人一人がつかんで、身につけて、その表現のしかたも多様になります。いわゆる布教するような宗教にはなりませんが、むしろ原初の宗教心に似たものだとは言えるでしょう。

(2) これからの宗教

私たちは天地のめぐみに、もう宗教的なものを感じ

じる習慣を忘れようとしています。むしろ天地のめぐみに宗教を感じるのは、若い人もかもしれません。

藤原辰也の『稲の大東亜共栄圏』（吉川弘文館）は面白い本でした。とくに、高名な農学者である寺尾博（陸羽132号の育成者）が昭和11年に、百姓を前に江戸時代の宮崎安定の有名な『農業全書』の次の箇所（8節でも引用）を引いて、百姓に講演した場面が印象的でした。

「それ農人耕作の事、その理り^{ことわ}り至りて深く稲を生ずるものは天なり。これを養うものは地なり。人は中にゐて天の気により土地のよろしきに順ひ、時を以て耕作につとむ。もしその勤なくば天地の生養を遂ぐべからず」

農業技術は「天地生養の道を立てるための手段であつて、感謝すべきは技術ではなく、天地の理法に、すなわち神様に対して有り難いと思わなくてはならない」という主旨です。

これに対して、30歳代の藤原は寺尾を「宗教家のようにふるまっている」とコメントしています。なるほどと思いました。戦前の百姓にとつては、自然を外から見る自然観はまだまだ浸透しておらず、そのことを農学者も知っていて、また、彼自身もまだまだ旧来の天地観を捨てきらずにいて、このような講演をしたのでしょうか。それに対して戦後生まれの藤原は、こういう天地観はまるで宗教のように感じるのです。

私はハッとしました。農本主義が宗教に近いのは、百姓が自然に没入し、その自然と一体になる境地を言葉にするからです。それは自然という概念

が西洋から入ってくる前の前近代の日本人の「天地観」と同じだからではないか、と気づいたのです。それは自然の内からのまなざしが優位だった時代のことです。

つまり、この天地観を科学にぶつけると、非科学＝宗教になるのです。現代に特有の科学万能の視点では、農本主義も宗教に見えてしまうということです。これを誤解されていると思わずに、近代を超えていくための道程だと考えてもいいでしょう。それにしても現代の人間が自然を外側から見下ろす自然観と、近代化される前の人間がその内側から見上げる天地観と、どちらが幸せな姿かと問われているような気がします。ひよつとすると現代の自然観の方が気の迷いなのかもしれません。

松田喜一の言葉をもう一度かみしめておきましょう。

信仰は理屈ではないから、実に厄介である。しかし、霊ある農作物や、動物が、芽が出たり、生まれたり、育つたり、それがことごとく天と地との靈力によることだけは、誰が考えてもわかるであろう。きしる機械の音の中で生活する職業でなく、紅塵の街に軒を並ぶる職業でもなく、对手が天と地の御力宮む職業であるから、百姓で信仰心が生まれなければ、外にはこれを養う途はないのである。

これが、百姓がすべからず宗教家になっていっても少しもおかしくはない理由なのです。現代社会は自然への渴望が満ちています。それが農へのあこがれや期待に変わっていくように、農本主義者は努力しようと思えます。それが新しい宗教だと言

われるなら、微笑んで、うなずけばいいでしょう。

（3）なぜ「自然への没入」が宗教になるのか

農本主義者にかぎらず、前近代の百姓には誰にでもみられる世界観とは、「人間は生きもの（食べもの）をつくることはできない。食べものはとれる、できる、なるもので、天地のめぐみだ」というものです。松田喜一は「天地の恩恵で稲や麦が育つという考え方は宗教である」と言っています。その理由は「いかなる科学も、未だ人間はもとより、虫一匹も造ることはできない。すなわち『生命』ということに及べば科学では、虫けら一匹がどうにもならぬのである。ここに人間の及ばぬある霊体がある。実際神様とて言わなければ始末がつかない無形のものがあつた」からです。

なぜ松田は「宗教」を持ち出したのでしょうか。その理由は明白です。百姓は「神」とも表現しなければ、他に言い表せないものを、四六時中感じるからです。それは「天地」の別名なのです。天地の「ご恩」「おかげ」「めぐみ」で、人間は生きているということを実感するからです。それは天地に充滿しているもので、人知が及ばぬ「霊体（霊性）」なのです。しかし、それだけで、はたして宗教になるのでしょうか。

宗教とは、人間の苦しみを「聖なる何ものか」の力で救うことです。高名な宗教学者の定義を聞きましよう。

宗教とは、生滅変化するこの世にあつて、それを超える「何もの」かのあることを信じ、それを体得

し、その中に生きんとする、人間のさまざまな営みをいう。

生滅変化とは、有限であり、相対的であり、部分的である、ということであるから、「何もの」とは、この三つを超えるもので、有限でなく、相対的でなく、部分的でない「何ものか」である。（『日本の神秘思想』金岡秀友）

言葉を換えれば、人間の知ではとらえることができない、人智を「超越したもの」を感じるときに、私たちは宗教的な世界に触れることとなります。しかし、「天地への没入」という言い方は、おかしなことです。これは「自然への没入」の影響です。なぜなら、没入しているときは、何に没入しているのかすら意識しないのですから、表現できない境地なのです。だから、松田は「忘我」と言っています。自分を忘れて、時を忘れて、場所を忘れてしまう境地は、それを天地自然の外から見るときに初めて、「天地への没入」「自然への没入」と表現できるのであります。つまり、近代的な表現なのです（宗教的な表現でもありません）。

かつての百姓は天地の外に出ることはありませんでした。それは不可能だったのです。それを可能にしたのは、「自然」という概念でした。私たちは「自然」と言った途端に、「自然」の外側に出ることができません。これは百姓仕事の忘我の境地の表現を容易にした反面、神から遠ざかることにもなります。

天地自然への没入は、天地と一体化することであり、忘我の世界であり、仏教が説く「解脱・覚り」に似ている、という人がいます。日本の仏教は、人間

の悩みを「不自然な」状態だと捉え、「自然な」状態の人間に戻していく道を教えようとしています。したがって、「自然に没入する」ことは「自然（な状態）に帰る」ことを、日本人なら想像します。「土に帰る」「大地に帰る」、そして、「自然に帰る」と言うときの、土や大地や自然は、一見、名詞の具体的なもののように思えますが、そうではなく形のない大きなもので、人間の力ではとらえることができない「何ものか」なのです。

ところが、西洋人的な発想に近づいてしまった現代の日本人は、これを文字通り「自然環境への没入」、つまり、「自然と一体化して、我を忘れた状態」と表現します。たしかに百姓仕事に没頭しているときには、我を忘れ、時を忘れ、いる場所を忘れ、何もかも忘れていて、ふと気がつく、「もうこんな時間か」ということはしょっちゅうあります。そして、我に帰った名残の中で周囲を見渡すと、そこにあるのは「自然な、天地自然」ですから、そうかこの状態は「自然への没入」と言えないこともないな、と思うのです。

この時に大切なことが二つあります。

(1) 没入する、あるいは包まれる、または一体化する天地自然とは、生きもので満たされていることです。いや天地自然そのものが生きもの（有情）です。この境地を支えてくれているのは、生きものだということ。ここが職人仕事の没入とは根本的にちがいます。

生きものと一体になっているときに、人間と生きものの垣根がなくなり、百姓の生きものへの情愛のふるさと、この境地にあるのです。百姓が生きものの気持ちがるような気になるのは、

この所為なのです。「稲のことは稲に聞け」と言う以上、田んぼの中で稲を対象化せずに、科学的に分析しないで、観察しないで、一緒に生きることなのです。これが松田喜一の「対手本位」の教えです（「生きもの調査」と「生きもの語り」も似たような試行・訓練でした）。

(2) 没入する百姓仕事は、手作業で、しかも、「単純作業」がいいのです。エンジン付きの機械は、常に人間の意識下に置かないと危険です。鎌や鋏は、習練で自分の身体の一部になってしまえば、無意識に動きます。複雑な仕事は、頭を使うので、没入できません。「単純作業」が一番楽しいのは、没入しやすいからです。その最たるものは、手取りの草とりです。没入していても、草は一本一本が百姓の相手をしてくれます（農業の専門家には、ぜひともこの草とりを体験して欲しいと願います）。

この境地を松田に代表される農本主義者は、「百姓仕事の喜び」「天業翼賛の境地」「百姓ならではの境地」などと表現し、労働や労働時間や効率などに對抗させ、百姓仕事の世界を守ろうとしたのです。

ここに農本主義者が再評価されなければならない最大の理由があります。百姓にとって、これは一番の「救い」なのです。「そうは言っても、食べていなくては」という反論には、松田は「生活のため百姓であってはならない」と、多くの言葉を費やしてきちんと答えています。農本主義は新しい時代の宗教なのです。でも、この宗教は、偉そうな教義とは無縁です。近代化される前から、天地有情の共同体がずっと引き継いできたものです。ささやかに一人一人の百姓を支え、いつでも苦しみを救ってくれるものです。百姓以外の人間も「農

に憧れる一番の理由がここにあります。

「たしかに、百姓仕事の忘我のひとときはいいもので、救われるが、現実に戻ると、そうはいかない」と言いたい気持ちはよくわかります。でも、宗教とはそういうものです。もういちど、『農魂の巻』を読んでみましょう。

百姓の最高峰は「天業翼賛の百姓」である。神様のお手伝い以上のものではないはずである。この心が「宗教」である。じつは私は長い間「農業の宗教化」を叫んで来た。農業こそ神仙に近づく途である。

百姓仕事で「相手本位」になることは、たぶん聖なる「何ものか」に近づくもつとも有力な方法なのです。

ここまでのことをまとめておきましょう。

(4) 天地はどこにあるか？

自分の中にある。無意識の中にある。

科学的にとらえるなら、天地自然は人間の外側に、対象化できるものや現象として存在します。それを意識的にとらえようとするのが、一般的です。しかし、無意識に感じている天地は、自分の外部にあるのではなく、自身の内部に取り込まれている世界なのです。

私たちは天地を意識的に感じている（とらえている）時間よりも、圧倒的に無意識に感じ（とらえている）時間のほうが多いのですが、そうは思っていない。なぜなら、無意識の世界は気づかないか

らです。

松田喜一が言う「忘我の境地」とは、百姓仕事に没頭しているときにやって来るものですが、これは無意識の世界で実現されていることはまちがいないでしょう。したがって、我に帰った（意識された世界に戻った）ときに、「我を忘れて、天地に没入していた」ことに気づくのです。

天地に没入していたということは、自分と天地が一体化して、自分の中に天地が入ってしまった状態だとも言えます。

「天地の声」を聞け、と松田がくり返し言うのは、天地自然を外から冷静に観察して、読み取ることではありません。これを、科学的に「自然の法則」を読み取ることだと考えるなら、「宗教化の百姓」にはなれません。

自分が無意識の世界で感じた（とらえた）天地の諸相に、気づくことが、松田の言う「宗教化」ではないでしょうか。

天地の声を読み取って、無意識に身体を動かして、仕事に没頭している自分がいるのです。自分の無意識の身体の動きに、天地の声が反映されているのです（ここが技術とはちがいます）。

(5) 百姓は無意識に天地を見ている

私たちが田畑に立って「気持ちがいい」と感じるときに、その理由を突きとめようとはしないときが多いでしょう。ただ「気持ちがいいものは、いいものだ」ということに尽きます。これこそ、天地自然を無意識に感じて（とらえて）いるのです。

最新の「脳科学」でも、なぜ意識や無意識が生ま

れてくるのかは、わかっていません。しかし、脳内は無意識ではなく、無意識に処理されている情報の方が多いことがわかっています。

ふと「何かが変だ」と感じて、「そうか、今年は赤とんぼがほとんど飛んでいない」と気づきますが、気づかないことの方が多いのです。

そこで、無意識に気づく方法はこれまでも述べてきましたが、大切なことを一つだけ付け加えておきます。松田喜一の言う「忘我」には、もう一つの側面があります。人間の欲望から遠ざかり、相手（作物や生きもの、天地有情）本位になることです（人間中心主義との決別です）。

人間の欲望に囚われているときは、ことごとく意識の世界でものをとらえています。しかし、そうではない見方も百姓の中にはあります。たとえば、田んぼの畦を「畦草から見ると、どう見えるだろうか」と考えるときがあります。毎日、一度だけ通る畦道は、私の足が踏みしめるだけで、畦の中央に一本の道が、背丈の低い草だけが並ぶ一本の道ができます。その一筋の道の、すべての草を踏みしめているわけではないのに、すべてが低くなってくるのです。もちろん、百姓はこのことを無意識に見ています。いちいち「なぜ、こんなになったのだろうか」とは考えません。

しかし、草は全身で、あるいは身体の一部で私の身体の重みを感じているのです。「重たいな」「よく飽きもせずに来るな」「今日も来てくれた」「オレは踏まれ強いからいいけども、あいつは枯れそうだな」「足跡の影響を気づいているのかな」などと、感じているのかもしれない。

百姓が相手本位になる心境は、相手への「情愛」

だと言われてきました。この情愛こそ、無意識の世界に本拠地を持つものではないでしょうか。

(6) 情愛は自己を超えた宗教なんだ

情愛とは、自分よりも相手を大切にしたいと思う時に、その真価を現します。松田の言う「対本位」になると、天地や作物の声が聞こえてくるのは、田畑が、稲や野菜が可愛いからだけでなく、自己愛よりも相手への情愛が勝ってくるからです。大雨の時に、夜中であっても、危険を冒してでも、田んぼに駆けつけるのは、稲や田んぼが自分の身よりも心配だからです。

この心境(精神性)を「宗教」と言わないなら、何と呼べばいいでしょうか。

こうした(自己愛ではない)情愛を無視して、労働時間や生産性を重視する思想は、農の精神性(本質)への冒涇だと思いますが、近代化主義者はこれを古い農業観への「挑戦」だと言い換えてきました。彼らの言い分の方がはるかに説得力をもっている現代の日本国で、小農の精神の真髄をこうして表現する意味が、ここにあるのです。

(7) 無意識の世界の豊かさ

無意識の世界があればこそ、ふと道端の小さな花にも気づきます。気づかない膨大な世界(天地)を背負って、人間は生きてきました。天地自然こそが、百姓にとつて無意識の広大な、豊穡な世界なのです。じつは私たちは、田畑で一服するときに、自分が抱え込んできた内なる天地自然を「見る」ので

す。いつも無意識に見ている目の前の風景や生きものは、私たちの大いなる一部なのです。この豊穡さを失ってはなりません。

かつて農業の近代化に期待をかけた人間も、「こんなはずではなかった」と、振り返らざるをえない時代になりました。ささやかに生きていくことが、ほんとうに難しくなっています。

農とは、資本主義社会(近代化社会)の意識的な価値観(自己や国家の欲望実現)とは、もともと相容れない営みだということを、どんなに資本主義社会に合わせていても、忘れないで生きていきたいものです。ふと道端の小さな花に気づくときに、その花に気づかせてくれる背後の無意識の世界の広さを、忘れないようにして。

〈第8章、第9章、終章〉(略)

【参考にした本】

- 山下惣一『小農救国論』創森社 2014年
- 菅 豊 『新しい野の学問』の時代へ』岩波書店 2013年
- 水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書 2014年
- 武田晴人『脱・成長神話』朝日新書 2014年
- ブルーノ・フライ他『幸福の政治経済学』ダイヤモンド社 2005年
- 柳田國男『先祖の話』ちくま文庫(全集13) 1990年

クリストコフ・コツホ 『意識をめぐる冒険』

岩波書店 2014年

渡辺京二 『さらば、政治よ：旅の仲間へ』

晶文社 2016年

相良 亨 『おのずから』としての自然』

(相良亨著作集第6巻)ペリカン社 1995年

立川武蔵 『日本仏教の思想』

講談社現代新書 1995年

溝口雄三 『世界像の形成(アジアから考える)』

東京大学出版会 1994年

渡辺尚志 『百姓たちの江戸時代』

ちくまプライマリー新書 2009年

篠原駿一郎 『生命科学のユートピア』

NHK出版 2015年

小浜逸郎 『無意識はどこにあるのか』

洋泉社 1998年

下條信輔 『意識』とは何だろうか』

講談社現代新書 1999年

【基礎となった拙著】

- 宇根 豊 『農本主義のすすめ』ちくま新書 2016年
- 宇根 豊 『愛国心と愛郷心』農文協 2015年
- 宇根 豊 『農本主義が未来を耕す』現代書館 2014年
- 宇根 豊 『農本主義へのいざない』創森社 2014年
- 宇根 豊 『百姓学宣言』農文協 2011年
- 宇根 豊 『生きもの語り』家の光協会 2015年
- 宇根 豊 『天地有情の農学』コモンズ 2007年
- 宇根 豊 『田んぼの忘れもの』葦書房 1993年